9 近畿ブロックのHIV医療体制整備

研究分担者　渡邊　大
(独) 国立病院機構大阪医療センター臨床研究センター
エイズ先端医療研究部 HIV感染制御研究室長

研究要旨

本研究の目的は、長期療養を必要とするHIV感染者を安心して治療できる診療システムと、救済医療を実施するためのシステムを構築することである。そのためには、近畿ブロックのHIV診療レベルの向上と連携強化、歯科や精神科疾患、救急医療、透析医療、長期療養の診療体制の整備などの課題の解決に資することにある。また、研修会の方法に関するニーズについてはアンケート調査を実施した。方法は主に、研修会の企画および実施、近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議の開催およびアンケート調査であった。12件の研修会に加え、大阪医療センターの地域医療支援室により15回の関連研修が行われた。近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議でHIV診療の課題について検討が行われ、社会福祉施設の受け入れの問題が最も多くの施設（7施設）であげられ、次いでスタッフの不足や育成の問題（5施設）があげられた。コミュニケーションに関する研修会ニーズ検討のためのアンケート調査では、臨床場面においてコミュニケーションに困難があること、コミュニケーションに関する研修機会の必要性を感じている医療者が多いことが明らかとなった。ブロック全体で質の高い診療を続けるためには、人材の育成、病院間連携の強化が必要と考えた。歯科診療、精神科疾患、長期療養、透析、救急医療の診療体制の整備も重要な課題である。拠点病院間や行政との連携の強化のみならず、地域全体との密な連携を伴ったHIV診療体制の構築が必要である。

A．研究目的

エイズ診療の近畿ブロックは、滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県の4つの府県で構成されている。 その中で、大阪府はHIV感染者とエイズ患者の報告件数が全国で2番目に多い。一方、残りの5府県は大阪府ほどの報告件数はない。しかし、患者数にかかわらずHIV診療には多くの課題が残されている。現時点では、長期療養を必要とするHIV感染者を安心して治療できる診療システムと、救済医療を実施するためのシステムを構築することが求められている。近畿ブロックの診療レベルの向上に加え、歯科および精神、救急、透析、長期療養などの課題や救済医療の実施にあたる諸問題があげられている。HIV診療の課題を解決するために、資材の開発や研修の実施が必要であり、それらに対しての評価と改善策の検討が必要である。

研修の方法の1つとしてコミュニケーション研修があげられる。これまで大阪医療センターが開催してきたHIV感染症におけるコミュニケーション研修会（以下：コミュニケーション研修会）のニーズを明らかにし、今後の研修会の質の向上に資することを目的として、アンケート調査を行なった（HIV感染症医療におけるコミュニケーションに関する研修会ニーズ検討のための研究）。

B．研究方法

研修・教育に用いた資材は添付の通りであった。

- あなたに知ってほしいこと
（https://osaka.hosp.go.jp/khac/data/anatani_shittehoshii_v14.pdf）

- HIV/AIDSの正しい知識～知ることから始めよう～（https://www.haart-support.jp/pdf/h31_knowledge_hiv_aids.pdf）
- 抗HIV治療ガイドライン（https://www.haart-support.jp/pdf/guideline2019r2.pdf）
- Healthy&Sexy（https://osaka.hosp.go.jp/khac/data/healthy-sexy2014.pdf）
- あなたとあなたのイイ人へ（https://osaka.hosp.go.jp/khac/data/anatato2014.pdf）

上記のうち、「あなたに知ってほしいこと」と「あなたとあなたのイイ人へ」、「Healthy&Sexy」の3点については大阪医療センターホームページからダウンロード可能である。

HIV感染症医療におけるコミュニケーションに関する研修会ニーズ検討のための研究に関しては、以下のように実施した。近畿ブロックにおけるエイズ治療拠点病院にてHIV診療に従事する医師、看護師、薬剤師、医療ソーシャルワーカー（MSW）又は精神保健福祉士（PSW）、カウンセラー、各職種1名を対象とした。対象者に対し、対象者の基本属性、コミュニケーション研修会への参加経験の有無、臨床場面のコミュニケーション上の困難の有無と内容、希望する研修内容について無記名自記式のアンケートを実施した。

（倫理面への配慮）

研修・教育に用いた症例呈示では、患者個人が特定されない等の配慮を行った。HIV感染症医療におけるコミュニケーションに関する研修会ニーズ検討のための研究は当院で倫理審査を受け、承認を得た。

C．研究結果

2019年度の研修会実施実績は表1のように12件であった（開催予定を4件含む）。中核拠点病院および各自治体でも研修会が企画され、主催された。講義形式のものが8件、ロールプレイも含まれるものが3件、臨床現場（診察等）も含まれるものが1件であり、講義形式のものが最も多かった。対象となった職種は医師（1件）・看護師（3件）・カウンセラー（1件）・MSW（1件）・歯科医師/歯科衛生士（3件）・多職種（1件）・その他（2件）であり、多くの職種が対象となっていた。多職種を対象とした研修会の1つでは、2018年からコミュニケーションスキルに関する研修をプログラムから削除していた。

資材（表2）に関しては、「あなたに知ってほしいこと」の改訂を2年続けて実施した。昨年度は5年ぶりの改定であったため、改定箇所が多かった。今年度の改定は、「令和」に変更したことと新薬に対応したことであった。2018年に作成した第13版では1日1回1錠の薬剤（STR）はゲンボイヤ®・トリーメク®・コムプレラ®の3剤のみ記載していた。

表1　実施実績

名　称	目的	主な対象	参加人数
HIV/AIDS看護研修（第1回 初心者コース）	知識普及	看護師	35
HIV感染症研修会	知識普及	多職種	49
HIV感染症医師一ヶ月実地研修	実習	医師	1
近畿ブロック エイズ診療拠点病院ソーシャルワーク研修会	教育・講習	MSW	33
HIV/AIDS看護研修（第2回 初心者コース）	知識普及	看護師	32
近畿ブロック HIV医療におけるカウンセリング研修会	教育・講習	カウンセラー	27
HIV/エイズに関する研修会	知識普及	その他医療関係者	27
歯科における院内感染対策研修会（兵庫医科大学病院）	知識普及	歯科医師、歯科衛生士	33
HIV/AIDS看護研修（応用コース）	教育・講習	看護師	
HIV感染症に関する講習会（滋賀医科大学医学部附属病院）	知識普及	その他医療関係者	
歯科における院内感染対策研修会（兵庫医科大学病院）	知識普及	歯科医師、歯科衛生士	
歯科における院内感染対策研修会（兵庫医科大学病院）	知識普及	歯科医師、歯科衛生士	

表2　研修・教育に用いた資材

名　称	作成者	研究班	主な使用方法
あなたに知ってほしいこと	大阪医療センター	「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」班	研修会・講習会で配布
HIV/AIDSの正しい知識～知ることから始めよう～	社会福祉法人武蔵野会	「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」班	研修会・講習会で配布
抗HIV治療ガイドライン	大阪医療センター	「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」班	研修会・講習会で配布
Healthy&Sexy	大阪医療センター	「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」班	研修会・講習会で配布
あなたとあなたのイイ人へ	大阪医療センター	「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」班	研修会・講習会で配布

STR以外の配合剤もしくは単剤は8つの薬剤（エプジコム®・ツルバダ®・デシコビ®HT・デシコビ®LT・プレジコビックス®・アイセントレス®600mg・アイセントレス®400mg・テビケイ®）を記載していた。2019年度に作成した第14版では、STRは5剤（ゲンボイヤ®・トリーメク®・ビクタルビ®・オデフシィ®・シムツーザ®）に増やし、STR以外の配合剤と単剤は4つ（デシコビ®HT・アイセントレス®600mg・アイセントレス®400mg・テビケイ®）に減らし、実際の服薬指導にあわせた形式に改定した。

2018年に地域医療支援室が設置され、外部の施設へ研修の講師に赴くことが容易になった。2019年は12月までに15回の関連研修を行った。医療施設に加え、社会福祉施設の職員や訪問看護師・介護士・ケアマネージャーなども対象となった。

近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議を2019年12月12日に実施した。各中核拠点病院におけるHIV診療の課題において、行政の担当者とともに共通認識を持つ場とした。ブロック拠点・中核拠点病院からのHIV診療の課題としては、社会福祉施設の受け入れの問題が最も多くの施設（7施設）であげられ、次いでスタッフの不足や育成の問題（5施設）があげられた。これは昨年度も同じ傾向であった。行政からは新規報告件数やエイズ患者の占める割合について報告がなされた。滋賀県ではエイズ患者の占める割合が高く、カウンセラー等による聞き取り調査の有効性について検討がなされた。

カウンセラー連絡会議を2020年2月1日に実施した。ブロック拠点病院ではHIV陽性者に対する様々な支援を検討し、実施する機会を有しているが、その他の医療機関では、マンパワーの不足や面接室の確保、他職種や院内心理士との連携の困難さが問題として挙げられた。また、自治体においては、雇用形態の変更に伴い、今後の業務に支障がでるかもしれないという懸念が挙げられ、安定して業務を遂行することが難しい可能性が示唆された。薬害HIV患者においては必要時には対応が可能であるという回答がほとんどであったが、経験の乏しさによる対応への不安が挙げられた。

HIV感染症医療におけるコミュニケーションに関する研修会ニーズ検討のための研究の結果は以下の通りである。回収率は13%であり、送付数220に対し、返答があったのは無効を除く28名であった。「職種」は医師の12名（43%）が最も多く、次いで看護師が7名（25%）、MSW又はPSWが4名（14%）、薬剤師が3名（11%）、心理士が2名（7%）であった。「職種における経験年数」では20年以上が13名（46%）であり、0～9年は8名（28%）であった。「HIVにおける経験年数」は、0～9年が18名（65%）であり、「症例件数」は0～19件が18名（64%）であった。「コミュニケーション研修会の参加経験」については、「なし」が22名（79%）、「コミュニケーションに関する研修会の必要性」については「必要」だと回答したのは24名（86%）であった。「臨床場面でのコミュニケーションの困難の有無」については、22名（79%）が「困難あり」と回答し、「困難に感じる場面」（複数回答あり）において最も多かったのは、「セルフケア（定期服薬や定期受診）が困難な患者への対応」で13件であった。次いで「性的な事柄についての聞きづらさや会話のしづらさ」、「メンタルヘルスが悪化したHIV陽性者への対応」がともに11件であった。「希望する研修内容」（複数回答あり）では、「事例検討」が25件で最も多く、そのうちの16件が多職種合同の事例検討を希望していた。次いでロールプレイが15件であり、そのうち7件が多職種合同を希望していた。

D．考察

今年度は12件の研修を行った。当院の地域医療支援室を通じて、15回の関連研修を行った。いままでの研修の多くは、ブロックまたは中核拠点病院で実施されたものであり、一つの施設からの多数の参加者は望めない状況であった。地域医療支援室が行う出前研修は、職務の調整をしていただければ、研修先の複数の職員に対して研修が可能であり、近畿ブロック内にHIV感染者を引き受けてもらう施設を広げる上で重要な手段のひとつになる可能性があると考えられた。近畿ブロックではこれらの研修会以外にも、多くの研修会を実施している。本研究班主催では薬剤師を主な対象とした研修会を行っていないが、それらの研修会は関西臨床カンファレンス（https://www.kansai-hiv.com/index.html）が主催で行っている。さらに、関西臨床カンファレンスでは薬剤師向けに加え、若手医師向け研修会（スキルアップセミナー等）・NGOやNPO交流会、カウンセリング部会なども行われている。研修後のアンケートでは概ね良好な評価を得ているが、研修・教育効果の評価方法については、引き続き検討が必要である。

HIV感染症医療におけるコミュニケーションに関する研修会ニーズ検討のための研究から、コミュニ

ケーション研修会の参加経験がないと回答した医療者が多い一方で、臨床場面においてコミュニケーションに困難があること、コミュニケーションに関する研修機会の必要性を感じている医療者が多いことが明らかとなった。希望する研修内容については、職種別での研修よりも多職種合同での事例検討やロールプレイが挙げられており、多職種との連携に関しての課題や必要性を感じていることが推察された。そのため、今後の研修内容については職種を交えた研修内容を提供する必要性が示唆されたとともに、ニーズに沿った研修会を開催することによってHIV医療体制の整備を図り、HIV陽性者を支援する機能を充実強化することが期待される。

E．結論

近畿ブロックでは、中核拠点病院が各府県のHIV診療の中核を担うようになった。今後もブロック全体で質の高い診療を続けるためには、人材の育成、病院間連携の強化が必要と考えた。歯科診療、精神科疾患、長期療養、透析、救急医療の診療体制の整備も重要な課題である。拠点病院間や行政との連携の強化のみならず、地域全体との密な連携を伴ったHIV診療体制の構築が必要である。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

1．論文発表

なし

2．学会発表

海外

1) Bessho H, Tanaka S, Ishihara A, Watanabe D, Uehira T, Ishida H, Shirasaka T, Mita E. Immune reconstitution inflammatory syndrome as a predictive factor for HBsAg seroclearance in HBV/HIV coinfected patients treated with antiretroviral therapy. European Association for the Study of Liver, The International Liver Congress 2019. April 11, 2019. Vienna, Austria.
2) Yagura H, Watanabe D, Nakauchi T, Kushida H, Tomishima K, Hirota K, Ueji T, Nishida Y, Miyabe Y, Sako R, Yamauchi K, Yamazaki K, Uehira T, Takuma Shirasaka. Discontinuation of long-term dolutegravir treatment is associated with UGT1A1 gene polymorphisms. 10th IAS Conference on HIV Science (IAS 2019). July 21, 2019. Mexico City, Mexico.
3) Yoshihara Y, Kato T, Watanabe D, Shirasaka T, Murai T. Differences of cognition and brain white matter between cART-treated HIV-infected patients with low and high CD4 nadir. NEUROSCIENCE 2019, Oct 23, 2019, Chicago, IL.

国内

1) 渡邊 大：HIV感染者の未解決の病態と抗HIV療法の未来。第2回大阪薬科大学学術交流シンポジウム、大阪、2019年10月19日
2) 渡邊 大：HIV感染症の課題と期待される病診連携。令和元年度HIV医療講習会、大阪、2019年10月31日
3) 渡邊 大：今後のHIV診療の期待と課題～2剤併用療法の新しい知見～。ViiV HIV Symposium 2019 in 大阪、大阪、2019年11月2日
4) 渡邊 大：HIV感染症の予後と死因Update。シンポジウム「治療の手引き」。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年11月29日
5) 渡邊 大：主要中核拠点病院での抗レトロウイルス治療の実際。シンポジウム「治療の手引き」。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年11月29日
6) 渡邊 大：HIV診療の長期的戦略を考える～ビクタルビ配合錠の臨床的特徴～。第4回 Gilead Infectious Disease Web Seminar、大阪、2019年12月23日
7) 渡邊 大、川畑拓也、森 治代、小島洋子、駒野淳、塩田達雄、中山英美、村上 努、桝田智仁、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。プロテアーゼ領域と逆転写酵素領域の配列を用いた新型変異HIV感染のスクリーニング法に関する検討。第33回近畿エイズ研究会学術集会、2019年6月8日、大阪
8) 廣田和之、渡邊 大、小泉祐介、坂梨大輔、上地隆史、西田恭治、竹田真未、田栗貴博、小澤健太郎、三鴨廣繁、白阪琢磨、上平朝子。当院のHIV感染者の皮膚軟部組織感染症における市中感染型メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染に関する検討。第33回近畿エイズ研究会学術集会、2019年6月8日、大阪
9) 矢倉裕輝、渡邊 大、中内崇夫、櫛田宏幸、西田恭治、宮部貴識、佐光留美、上平朝子、山内一恭、白阪琢磨。日本人HIV-1感染症患者における投与開始早期のテノホビル血漿トラフ濃度高値とテノホビルジソプロキシルフマル酸塩の長期投与時の腎機能関連有害事象による投与中止の関連。第33回 近畿エイズ研究会学術集会、2019年6月8日、大阪

10) 高野浩司、西本渓佑、山﨑弘輝、村上皓紀、館哲郎、木谷知樹、金村米博、中島 伸、桝田智仁、来住知美、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、藤中俊之。HIV陽性患者の中枢神経病変－脳生検術の必要性－。日本脳神経外科学会第78回学術集会、2019年10月9日、大阪
11) 蜂谷敦子、佐々木 悟、伊藤俊広、潟永博之、岡 慎一、渡邊 大、白阪琢磨、南 留美、山本政弘、松田昌和、重見 麗、岡﨑玲子、岩谷靖雅、横幕能行、杉浦 亙、吉村和久、菊地 正、薬剤耐性HIV調査ネットワーク。国内新規HIV/AIDS診断症例における薬剤耐性HIV-1の動向。第73回国立病院総合医学会、2019年11月8日、名古屋
12) 今橋真弓、岡 慎一、伊藤俊広、山本政弘、渡邊 大、宇佐美雄司、池田和子、本田美和子、吉野宗弘、横幕能行。エイズ診療で国立病院機構が地域で果たすべき役割。第73回国立病院総合医学会、2019年11月8日、名古屋
13) 矢倉裕輝、櫛田宏幸、渡邊 大、中内崇夫、西田恭治、宮部貴識、佐光留美、上平朝子、白阪琢磨、山内一恭。ラルテグラビル1日1回1200mg投与における血漿中トラフ濃度に関する検討。第73回国立病院総合医学会、2019年11月8日、名古屋
14) 中内崇夫、矢倉裕輝、櫛田宏幸、桝田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。当院におけるリルピビリン/エムトリシタビン/テノホビルアラフェナミドフマル酸塩配合錠の使用状況について。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年11月27日
15) 櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、桝田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。ラルテグラビルカリウムの投与法間におけるトラフ血漿中濃度の比較検討。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年11月29日
16) 矢倉裕輝、中内崇夫、櫛田宏幸、桝田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。テノホビルアラフェナミド投与時のテノホビル血漿トラフ濃度に関する検討。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年11月29日
17) 蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、岡 慎一、潟永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、太田康男、茂呂 寛、渡邉珠代、松田昌和、重見麗、岡﨑玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、小島洋子、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦 亙、吉村和久、菊地 正。国内新規HIV/AIDS診断症例における薬剤耐性HIV-1の動向。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年11月28日
18) 川畑拓也、上原大知、伊禮之直、真栄田哲、崎原永辰、仲宗根正、仁平 稔、久高 潤、渡邊 大、大森亮介、駒野 淳、阪野文哉、小島洋子、森 治代、本村和嗣。健診機会を利用したHIV･梅毒検査提供に向けた検討。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年11月27日
19) 渡邊 大、上平朝子、鍵浦文子、松山亮太、梯正之、砂川富正、白阪琢磨。当院の新規診断HIV感染者における診断時CD4陽性Tリンパ球数と血中HIV-RNA量の年次推移に関する検討。第33回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2019年11月28日

H．知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1．特許取得

なし

2．実用新案登録

なし

3．その他

なし